

## 日々の臨床におけるチェアラボコミュニケーション（デジタル編）

デジタル技術の進展により、補綴臨床におけるチェアサイドとラボサイドの連携がこれまで以上に重要視されている。近年、日本国内における口腔内スキャナー（以下、IOS）の導入率は約10%程度に留まるが、その普及は今後さらに進むと予測される。IOSは印象採得機器としての役割を超え、精細なデジタル画像を活用した情報共有ツールとして機能し、補綴製作や患者コミュニケーションの双方において強力な効果を発揮する。

一方で、補綴臨床の現場では、IOSを含むデジタル技術を適切に活用するために、歯科医師と歯科技工士の双方がそれぞれのプロセスを理解し合う必要がある。チェアサイドではラボサイドでの補綴物製作の流れを把握すること、特に模型を介さず補綴物を製作するモデルレス技術に関する知識の習得が求められる。ラボサイドでは、デジタルスキャンの特性や臨床での使用状況を理解することで、補綴物製作の精度向上やトラブル解決への対応が可能となる。

本講演では、チェアサイドとラボサイドの連携を軸に、デジタル技術を活用した審美歯科治療の最新動向と、その実践的応用について議論する。IOSをはじめとするデジタルツールの導入や活用における具体的な課題と対応策を、多数の臨床画像や動画を交えて供覧する。また、補綴製作におけるデジタル技術の利点や、患者満足度向上と長期予後の確保につながる診療プロセスの最適化についても触れる予定である。

歯科医師と歯科技工士がデジタル臨床において果たすべき役割、そして補綴臨床の未来に向けた新たな可能性について参加者の皆様とともに考察を深めたい。

医療法人きむら歯科医院

木村正人

2009年 東京歯科大学卒業

2010年 千葉県内にて勤務

2016年 医療法人きむら歯科医院（岡山県）副院長

2023年 同 院長

日本臨床歯周病学会 認定医

日本顕微鏡歯科学会 認定医

日本顎咬合学会 認定医

日本接着歯学会 会員

日本口腔インプラント学会 会員

日本臨床歯科学会（SJCD） 会員

スタディグループ BTB 主宰

## 「デジタル機器の活用を考える」

～歯科医院との連携、効率化、購入タイミングについて～

誌面や講演会ではデジタルデンティストリーという言葉を見聞きするが、実際どのくらいデジタル化しているだろうか。ラボによっては半分以上の仕事がモデルレス技工になったとか、ほとんどをデジタル化しているという話も聞く。

一方で一般技工の9割以上が保険技工でありこれらは現在まだ一部しかデジタル化の必要がなく、加えて3人以下の歯科技工所が8割を超える現状では加工機まで揃えるのは難しい現実もある。周囲の話から焦りを感じてスキャナーや加工機を買ったが、思ったほど使用できずに後悔しているという場合もあるようだ。

部分的にデジタル化することで術者の時間を作ったり、仕事の幅を増やす事ができるので重宝するが、現状のシステムでは全てをデジタル化する事で逆に手間がかかったり、コストに見合わなかったりするケースもある。しかし、歯科医院と連携をする上でなくてはならないツールとなってきたのは間違いない。

私の臨床ケースを通してデジタル化によって変わる事と、デジタル機器導入の経緯を成功談だけでなく、失敗談も含めてお話ししようと思う。

名前：政廣 明德（まさひろ あきのり）

昭和56年10月22日生まれ

平成16年 岡山歯科技工専門学院 入学

平成18年 岡山歯科技工専門学院 卒業

平成18年 (株)デンタルオフィス・マサヒロ 入社

平成27年 (株)松風インストラクター

令和2年 (株)デンタルオフィス・マサヒロ 代表取締役